

---

Do you really love me...?

來霧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Do you really love me...?

### 【Nコード】

N5404Q

### 【作者名】

來霧

### 【あらすじ】

彼女いない暦は年齢だと同じだった。でも・・・でも、この軽さは普通じゃないだろう!?いくら経験が無くても、そのくらいは分かる。 というくらいに軽いノリの彼女、倉本 美月に振り回される俺。 いいかげんにしてくれ、と思い別れを告げた、はずだった、のに。 可笑しなテンションの美月に共感度0%、かも。

## 1・クエスチョンマーク×クエスチョンマーク

そいつ、倉本<sup>くらもと</sup> 美月<sup>みづき</sup>が可笑しなことを言い出したのは数週間前のことだった。

俺はいつもと同じように、祐希<sup>ゆうき</sup>と啓<sup>けい</sup>と その他、クラスの男子と話していた。

二時間目と三時間目の間の、十分ほどの短い休み時間だったが、珍しいことではない。

教師もいないその時間、教卓の周りでフザけ半分で教卓をあさったりしている、誰かと 秋元<sup>あきもと</sup> 優華<sup>ゆうか</sup>と話している倉本が、急に話しかけてきた。

「ねえ、三室<sup>みむろ</sup>」

俺の名前を呼ぶと、こっちを向いてくる。

いつかストパーをかけたらしい、肩まであるかないかのその髪が揺れていた。

俺は一応声のした方向を向く。すると、

「なんで眼鏡外すの？」

悪意も何も感じさせない口調と表情で、倉本は聞いてきた。

どう答えればいいのか分からない。残念ながらこんな状況に対応できる言葉は、俺の辞書に載っていなかった。

「・・・は？」

精一杯の反応。

こんな問いかけをされたことは無かった。というより、こんな風に問いかけられたことはなかった。

宿題もしてこないし、成績だって悪い俺は、責められたり呆れられたり、馬鹿にされたりするような言動はされても、女子から「普通の態度」で話しかけられたことはないのだ。

・・・ちよつと惨めになってきたが、とにかく俺は反応のしかたがわからなかった。

逃げるように廊下に出て、くだらない会話に戻る。

「あ、ちよつと」という声は聞こえたが、どうやら追ってくる様子もない。

倉本は、何事もなかったように雑談を交わしていた。

そのときは特に、何も気にしていなかった。

そう、何も、気にも留めていなかった。

## 1・クエスチョンマーク×クエスチョンマーク（後書き）

男の子視点の小説は初めてです。

「こんなこと思わねーよ！」という部分もあるかもしれませんが、ご了承ください。

美月は自分の言動を基にキャラ設定しています。ようするに、作者も美月も思考回路が変なんです。

よかったら、読んでやってください（汗）

## 2・一虚一実

眼鏡っていうのは、多分、数週間前に買った黒縁眼鏡のことだろう。最近目が悪くなってきたので、社会と数学、そして部活のときにだけかけているそれだ。

確か倉本の前でいつか、それをかけていた気がする。

まだ買ったばかりで、変だと言われないか内心ビクついていたとき、あてがうように目に持っていったのだ。

偶然、俺の席の前で誰かと話していた倉本の視線の先に、俺がいたらしい。

直後、彼女は卒倒ってというか座り込んだだけなんだけど。「可愛い」を連呼してた気がする。

え、俺のこと？あんまり嬉しくない。

要するに、なんだ、惚れられた？

・・・と、思ったのは束の間。

「俺さ、前倉本に可愛いとか言われてたんだけど・・・気持ち悪い」

「あ、俺も。つか、アイツ誰にでも言ってるだろ、直接じゃないけどさ、秋元と一緒に」

「あ？そーなん？」

祐希と和哉かずやがそんな話をしていたのは昼休み。

担任は「給食の片付けして」やら何やら言ってるが、そんなのガン無視。

そういえばいつも片付けているのは、話題になってる倉本だっけ。

「俺も言われたぜ、なんか変なこと」

テキストに話を合わせながら、安心したような残念なようなよく分

からない感情が頭の中で蠢く。

誰にでも言ってるのか、じゃあ、誰でもいいのか？

誰でもいい？誰でもいいって・・・いいって、何が？

そんなことを思っていると、いつの間にか彼女はこちらに来ていた。そして俺たちには目もくれず、窓際のロッカーの上の巻かれた模造紙を手を取った。

それを広げると、筆箱を取ってきてシャーペンで何か書き始めた。

ちらりと目を向けると、どうやら委員会の仕事のようだ。

誰か誘えばいいものを、彼女は一人でやるつもりらしい。

他の教室へ行こうと廊下に出ようとしたとき、彼女の声が聞こえた。視線をやると、彼女は啓の方を見ながら、誰かに「可愛い」と言っていた。

うん、本当に誰にでも言うらしい。

俺の中での彼女の印象は「成績優秀な普通のクラスメイト」だったので、少しイメージが崩れた気がした。

まあ、特別美人とか可愛いとかでは無いのでイメージがどうなる endpoint 関係ないのだが。

俺は半ば呆れながら、いつもと同じように騒がしい廊下に出て行った。

## 2・一虚一実(後書き)

多分タイトルと中身は一致していない・・・。

三室君、平凡(?)な男子生徒ですが不真面目度高め。いや、かなり高い。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5404q/>

---

Do you really love me...?

2011年10月8日13時46分発行